

5) 皮膚科領域におけるシェーグレン症候群と類縁疾患

田中 正明 (新潟大学皮膚科)

シェーグレン症候群は今まで皮膚科領域で扱うことはほとんどなかった。最近種々の特殊検査や抗 SS-A, SS-B 抗体などによる診断技術の向上により症例数が増すとともに、本症に伴う種々の皮疹が注目されてきている。今回、乾燥症状、関節痛などは軽度で皮疹を主訴として当科を受診し、検索の結果、シェーグレン症候群の診断基準を満たした40歳女性の顔面の環状紅斑例、55歳男性の上半身に生じた色素沈着を伴う不整型滲出性紅斑例、57歳女性の顔面の浸潤性紅斑例3例を報告し、LE などと比較したその臨床像、組織像の特徴を述べ、本症の早期診断における皮疹特に種々の紅斑の重要性を強調した。さらに本症と類似の皮疹を呈する subacute cutaneous LE, autoimmune annular erythema, neonatal LE のそれぞれ臨床例を紹介し本症との関係を考察した。また抗リンパ球単クローン抗体を用いた免疫組織所見より本症の皮疹の成立機序に細胞性免疫機序の関与することを推測した。

第17回新潟画像医学研究会

日 時 昭和62年6月13日(土)  
午後1時より6時まで  
会 場 セレモニーホール新潟

一 般 演 題

1) 軽症頭部外傷にみられた多発性脳内血腫の2例

○小池 俊朗・今野 公和 (国保水原郷病院)  
本田 吉穂・小泉 孝幸 (脳神経外科)

臨床的には脳振盪以下と思われる軽症頭部外傷において、CT 上多発脳内血腫を認めた症例を経験したので報告する。

症例1. 61才、男性。1986年12月22日、酒に酔い階段から転落受傷。翌朝から意識清明となるが、受傷から翌朝までの健忘症を認めたため、12月27日当科紹介。CT にて右前頭葉に3ヶ所、左前頭葉に4ヶ所に散在する小円形高吸収域を認めた。これは造影されず。CT を追跡して、低又は等吸収域となり消失したので、多発性脳内血腫と診断した。

症例2. 71才、男性。1987年1月5日、梯子から落下受傷。両上肢しびれ、当科紹介。意識清明。主訴の他、項背部痛のみ。CT で右前頭葉皮質下、左前頭葉内側くも膜下、左尾状核部に同様の高吸収域を認め、多発脳内血腫と診断した。CT 追跡で血腫は消失した。2例とも頭蓋骨々折なし、凝固能も正常。

これら外傷性多発脳内血腫2例の発生機序に関して文献的考察を加え報告した。

2) 脳挫傷における MRI の有用性

○関原 芳夫・栗田 勇 (新潟中央病院)  
本田 吉穂・岡田 耕坪 (脳神経外科)

頭部外傷における MRI の有用性について検討した。(対象および方法) 対象は臨床的に脳挫傷と診断された症例(頭蓋内血腫合併例も含む)で、同時期に CT, MRI を施行し得た87例である。使用した機種は旭 Murk-J (0.1 T) である。(結果) 1. MRI 所見: 経時的観察にて脳挫傷は IR で low, SE で high intensity を示し、約3カ月後には contusional encephalomalacia とも呼ぶべき像を示した。外傷性脳内血腫では、特に IR で high intensity ring を呈するのが特徴的であった。2. CT との比較: CT に比し病巣検出率で圧倒的に MRI が優れ、特に頭蓋底病変、脳幹病変で明らかであった。パルス系列では、急性期は spin echo 法、慢性期は inversion recovery 法が有用であった。(結論) MRI は施行する上で種々の制約はあるものの、脳挫傷の病態把握に際しかなりの有用性があると思われた。

3) 硬膜静脈洞壁小脂肪塊の2症例

— CT 所見と剖検所見について—

○登木口 進・倉島 昭彦 (新潟大学歯学部)  
伊藤 寿介 (放射線科)  
高橋 均・新保 義勝 (新潟大学脳研究)  
茂木 崇司 (所実験病理)

以前演者らは上矢状静脈洞及び静脈洞交会に CT 上、脂肪の存在する例がある事を報告しており、更にそれらが腫瘍性のものではなく正常脂肪組織であろうと推論した。今回、上述の2例を剖検する機会を得、病理学的所見が判った。すなわち CT 上認められた脂肪は、正常の脂肪組織の小塊であり、腫瘍性変化はなかった。また脂肪塊は静脈洞の外側壁に存在しており、静脈洞内には突出していなかった。頭蓋内脂肪は神経放射線診断学上、重要な所見であり、今回の報告結果は中枢神経系の画像診断に寄与するところが大であると思われる。